

第8回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン

企画2 《エイシスとガラテア》

演奏会批評 (岸純信氏)

『音楽の友』2011年3月号

ヘンデル・フェスティバル・ジャパン《エイシスとガラテア》

歌唱者も楽器奏者もしかと心を通わせた《エイシスとガラテア》(演奏会形式)。1718年にヘンデルがイギリスで初めて発表した英語の音楽劇で、まずはエイシス役の辻裕久(ト)をはじめ4名のソリストが発音にも深く傾注。ニンフのガラテア役の広瀬奈緒(S)の透明感著しい声音がことに情感豊かに響き渡り、辻との有名な二重唱 *Allegro* *Molto* を代表格にこの曲も流麗に歌い上げた。また、怪物ホリフィーマス役でヴェテラン牧野正人(Br)が参加、エイシス殺害の三重唱など声の勢いも著しく、ドラマの推進力として本領発揮。また、羊飼いでイモン役の前田ヒロミツ(ト)も熟演し、滑らかな響きを駆使して忠告者の責務を全う。二澤寿喜の颯爽たる指揮ぶりのもと、キヤノンズ・コンサート室内合唱団&管弦楽団も健闘。難易度の高いコロラトゥーラを主力投球で歌い上げる合唱団と、木管の三宮正満を始め全員が集中力を発揮した管弦楽団にも賞辞を呈したい。(1月13日・浜響島朝日ホール) 岸純信